

## 付章

### 里館遺跡の古絵図「斉藤家五代目善右衛門豊昌様之里館の絵図」について

#### 1 はじめに

「斉藤家五代目善右衛門豊昌様之里館の絵図」は、今次調査区の土地所有者である宗教法人天昌寺が、所有する絵図である。白黒複写（コピー）したものを天昌寺の先代住職の親が入手したものであるということ以外、詳しい来歴は不明であり、原本の所在は不明である。

現存するコピーから、絵図は86.0cm×78.5cm以上の大きさであり、裏に41.5cm×20.5cmほどの裏書がある。原本はおそらく、和紙を接いだもので、墨と所々に朱等で描かれたものと推察される。

この絵図に描かれた地点の範囲は、今次調査地点及びその周囲と考えられることから、書き下し翻刻した（第34図）。また、併せて絵図の内容と今次発掘調査及び第1次、第29次、第56次の発掘調査成果と比較した。

#### 2 絵図について

書き下し翻刻したものを第34図に掲載した。以下、絵図の内容を概観する。

本絵図には、中央南寄りに描かれた屋敷と、その周囲の建物、構造物、土地利用、立木の種類などが描かれている。屋敷は、その構造や建具の数などのほか、板敷き、窓の種類などが詳細に記述され、柱間寸法なども、おおよそ正確に描かれていると見られる。しかし、この屋敷と中央やや北寄りの祠、屋敷南西側建物以外の建物や構造物は、その描き方の差から、概ねの規模と位置関係を記したものと考えられる。

裏書には、建物の規模や建具類の数の記録や建築から改築の経緯が記されている（下段参照）。これによればこの絵図は、文政5年（1822年）の秋に改築完成した屋敷について、恐らくこの屋敷の主である豊昌のために書いたものである。屋敷は、安永年間（1772～1780年）から建築に着手し、寛政6年（1794年）に建替え、寛政、享和、文化年間に手入れをし、文政5年秋にこの絵図の形に完成したようである。また、文政7年に屋根改修（差し萱？）も行ったことが、文政七年に追記されたものと見られる。

これらのことから、本絵図は文政5年秋以降に描かれたものと考えられる。文政7年の改修についての2行は、筆跡などから、文政7年以降に書き加えられたものと推察される。

次に、絵図の内容を見てみる。

絵図は四隅にそれぞれ東西南北の方位が書かれ、中央南寄りに屋敷が描かれる。

この屋敷は、北側に土間の入口、西側に大戸入口がある。建物中央には常居の座敷があり、その周囲に座敷や板間などが配置された大規模なものだった。

絵図の南東辺中央付近に、道と入口が見え、階段状の表記がある。その登りきったところに冠木門のような表記が見える。そこから東西に分かれた道が北へ延び、西側には鳥居があり、北側の祠へと通じる。東の突き当りには、冠木門が見える。この冠木門の北東側に屋敷が立地する。屋敷の東側には、庭園が整備されている。「文政十一年五月庭作直し」とあり、建築当初から庭園が整備されていたようである。南側は池が整備されていたと思われ、中島や石灯笼、松、さつき、キャラ木、トクサなど植栽が表記されている。池の北側には、石灯笼が置かれ松などが植えられていた。屋敷東側の九畳の座敷の障子を開け廻り縁に立てば、この庭園と借景として東方の早池峰山などの山々が望める構造だったのではないだろうか。庭園の東側には柴垣（?）、北側には六間分の板塀で区画されている。庭園の南側

から石段付近までは段丘となり、木が生い茂る林となっていたようである。

屋敷の北東側には前庭（前二ハ）、北西には祠へ通じる参道、その参道入り口の西側に便所、便所の南側は畑と物干し場、冠木門のすぐ西には井戸、南東には空き地と便所のような建物が配されている。その外側は、畑として利用されていたようである。

屋敷地の道を挟んだ南西には、桁行七間梁行三間、北西側に三間突き出る曲家状の建物と、その東には北側に入口を持つ小屋がある。この建物には、「文政十亥十月 三間四間 新規建替」「三重郎父」と表記されている。これは、水路を隔て西側の「四百四十坪 里館三重郎」の父の家と考えられる。

庭園の北東には、松が植えられた土手が巡る「志福魂宮」というお堂が見える。現在の、供養塔北側付近の駐車場の地点に当たるか。

また、屋敷北西側の通路の奥には、鳥居が建ち、西へ折れるとまた鳥居があり、その北側に三間二間の祠がある。杉や松の生える土手で囲まれ、「文政十亥十月□□□□」とある。現在のガソリンスタンド西側の駐車場入口から西のビルに当たるか。その北には、東西に道が延び、現在の国道 46 号線付近と考えられる。おそらく第 1 次調査で検出した「稻荷社跡」に係る建物を指すものと考えられる。

屋敷地の北から東にかけては、用水路があり、これには「岩鷲山天昌寺 廻りの沢堰境なり」と表記され、天昌寺との土地の境界線とみなされていたようである。この用水路は、城館の堀跡をそのまま転用されたものと考えられ、現在も用水路として使われている。

### 3 発掘調査成果との比較

発掘調査で検出した遺構と、この絵図の建物など構造物の位置関係を比較する。

現在の天昌寺と今次及び第 56 次調査範囲を隔てる水路跡は、本絵図の北から東にかけて描かれている用水路と考えられる。用水路とその東側の「岩鷲山天昌寺」は現在の位置と変わらないだろう。絵図に描かれたこの用水路は、北側から西方へ屈曲し延びる。この水路は現在もなお水路として残っており、場所が比定できる。

本図の中央やや北寄りに見える「文政十年（1817）亥十月□□□□」とある鳥居と祠は、第 1 次調査で検出した「稻荷社跡」の建物跡と鳥居跡であることが、位置関係や構造から比定できる。

以上の位置関係を参考にすると、本絵図中央南寄りの屋敷の北西側に、梁間 1 間桁行 3 間の東西棟の便所が描かれているが、今次調査区北西隅の RB320 掘立柱建物跡の可能性もある。また、第 56 次調査の RZ002・003・004 は、本絵図東隅の庭の池の痕跡または作庭時の何らかの痕跡の可能性が考えられる。

一方、本絵図に描かれた屋敷は、今次調査及び第 56 次調査で検出した掘立柱建物跡とは、柱配置等から比定することはできなかった。これは、本絵図に描かれた文政年間頃のこの規模の建物は、表土上に礎石を据えて柱などを建てる石場建てになっている時期と考えられ、遺構掘削深度が浅かったため、遺構として検出できなかったものと考えられる。

しかし、この絵図が描かれる前に掘立柱建物で作られた鳥居や祠建物（第 1 次調査報告における稻荷社跡）は、代々その場所を変えずに場所が受け継がれたこと、そして便所跡は石場建てよりも簡便な掘立柱建物で作られていたことにより、発掘調査でその柱穴が検出されたものと考えられる。

#### 4 まとめ

「盛岡藩家老席日誌 雑書」享保12年（1727年）3月20日の記事に、下栗谷河村三十郎居宅が失火により焼失し、天照寺（天昌寺）もその飛び火により焼亡したと記されている（下段参照）。本絵図の中央やや北寄りに、「里館□（無カ？）高屋敷 享保十五年庚戌□□上有 文政五壬午年迄 九十三年に成候 千坪半 里館 三十郎」とみえる。これは享保15年から文政5年まで93年たっており、雑書に見える享保12年の火災で焼失した三十郎居宅があった享保年間以降、この場所には屋敷がなかったという意味と推察される。（絵図には享保15年とあるが、享保12年の誤りか。）本絵図の南隅には「四百四十坪 里館三重郎」と見える。雑書に見える河村三十郎と関係があるかは不明である。なお、天昌寺の由来には、この火災のことは記載されていないようである。

残念ながら、管見の限りでは、本絵図の主である斉藤家五代目善右衛門豊昌の情報は見つけられなかった。

以上のことから、本絵図は本発掘調査成果と共に、近世後期におけるこの場所の土地利用について、詳しく知ることのできる貴重な資料と言えよう。

最後に、本稿に当たり、宗教法人天昌寺、安田隼人氏（元盛岡市都南歴史民俗資料館学芸員）、菊池早希氏（盛岡市教育委員会事務局歴史文化課学芸調査員）の多大なる御協力を頂いた。記して感謝申し上げます。（今野公顕）

#### 【引用参考文献】

盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館 1999『盛岡藩家老席日誌 雑書』第13巻 P385 熊谷印刷

盛岡市教育委員会 1985『盛岡市埋蔵文化財調査年報—昭和55～58年度—』

盛岡市遺跡の学び館 2013『里館遺跡-供養塔および駐車場造成に伴う緊急発掘調査報告書-』宗教法人天昌寺・盛岡市教育委員会

「齊藤家五代目善右衛門豊昌様之里館の絵図」裏書

家梁四間四尺桁行八間四尺西南三間宛出家  
 畳四拾四畳外六畳有りノ五拾畳

小障子 六数  
ママの間違いか

障子 三十二数

小襖戸 六数

大襖戸 十三数 外四数 □式数

戸 式十数

雨戸 拾八数

大戸 壹数

坪 六十五□

屋根坪ノ百式拾はと

右建屋北附廻り

此図は豊昌様之

被為書候絵図なり

文政五年秋御□被成候

安永年中す屋しき地段々手入いたし

寛政六寅に建替

寛政年□ノ享和年

文化年中家手入文政五年壬午秋改

同七年中「(不鮮明判読不能)」

同屋根差「(不鮮明判読不能)」

下厨川邑里館之屋敷絵図

七座敷外板間也

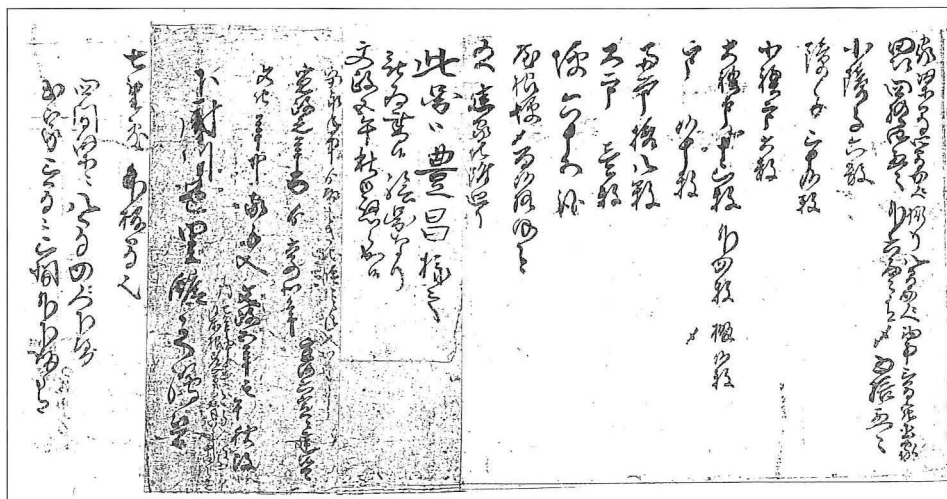
四間梁に八間四尺下屋

式家三間に三間下屋有

「盛岡藩家老席日誌 雑書」第十三卷 P 385

享保十二年三ノ廿日 晴天

一 栗谷川通御代官所之内、下栗谷河村三十郎居宅自火にて焼失、夫より天照寺  
 飛移焼亡仕候旨、御代官高杉新兵衛訴之、右火本五人組預置候由、申上之



「齊藤家五代目善右衛門豊昌様之里館の絵図」裏書



